

ことばの獲得初期における音楽的表現
—子どもがうたい始めるとき—

細田 淳子

(平成12年10月5日受理)

Musical Expression at the Beginning of Infant Language
Acquisition

—Time when Children Begin to Sing—

Junko Hosoda

(Received on October 5, 2000)

キーワード：うたの始まり、ことばの獲得、幼児、音楽的表現、発達

Key words: rudimentary singing, language acquisition, infant, musical expression, development

1. はじめに

新生児は、出生直後の産声に始まり、空腹時や不快な時の泣き声、ため息、あくび、など多様な音声を発する。そしてそれらの発声を繰り返すことを楽しみながら発声器官を発達させ、周りからの音声による刺激と、自分の声を繰り返し聴くことで、聴覚を発達させていく。

乳児の声は「純然たる言語への発展の系脈と、音楽性の獲得のための系脈とのふたつの道が未分化のまま包括されている。」という園部（1975）の考え方に代表されるように、次第に「ことば」と「歌」に分化していく、と一般的に考えられている。しかし、どのようにして、いつ頃から、分化して行くものなのか、といった点には不明な点が多い。

乳児はすこしずつ、ことばやメロディーを身に付けていくのであるが、そのことばの習得や歌の始まりを支えているのは、いっしょに声を出し、楽しさを感じあうことのできる人間関係だと考えられる。そこに表現を受け止めてくれる大人や、その時を共有したい仲間がいる、ということが特に重要な要素である。

したがって、歌の始まりに関わる研究は、音楽的な分析だけではなく、人間関係を中心にした様々な視点を含む総合的なものでなければならない。

そこで本研究では、保育室の1歳児クラスで、ことばや歌を習得しつつある4人を研究対象とし、かれらと日々の生活を共にしている保育者¹⁾と筆者とが協力してこのテーマに取り組むことにした。保育における音楽表現の芽生えと育ちを、子どもの生活全体から総合的に見ていこうとするためである。

2. 子どもがうたい始めるとき

2-1 研究の目的

ことばを話すことと、歌をうたうことは、ともに音声による表現であるが、その両者の関係は必ずしも明かになっているとは言えない。その獲得の時間的順序についても、ことばが歌より先に獲得されると主張する研究（永田1981）や、逆に歌が先であるという研究（伊藤1987）など、さまざまである。

そこで本研究では、ことばを急に発し始めるころ、つまりことばを獲得し始める時期（初期）に注目しつつ、うたい始めの様子を明らかにすることを目的とする。今

表1 研究対象児の入室時期

子ども	生まれ	入室
E女児	97.7.25	98年4月に8ヵ月で
Y男児	97.8.3	99年4月に1歳8ヵ月で
R男児	97.7.26	99年4月に1歳6ヵ月で
T男児	97.12.11	98年4月に3ヵ月で

回は、特に歌のはじまりとことばの獲得の相関を、保育施設の日常生活の中に見ていくことにする。

2-2 研究の対象

本研究では本学ナースリールーム（産休明けから3歳未満児の保育室）に在室する、1歳児クラス「たんぽぽぐみ」の4名を対象とする。丁度立って歩けるようになり、ことばを話し始めるかどうかというくらいの発達段階の子どもたちであること。そして何より、共同研究者が、その子どもたちと毎日の生活を共にしている保育者であるため、このクラスを対象とすることにした。

対象児は女兒1名と男児3名の生年月日に約5ヵ月の開きのある4名である。入室時期には（表1）の通り、17ヵ月の開きがある。

2-3 研究の方法

期間は、1999年4月から11月まで、特に日時を定めずビデオ²⁾に各児の生活を収録し、観察記録をとった。後にビデオ、記録、および担当保育者による保育日誌から、歌に関するもの、ことばに関するもの、動きに関するもの、の3項目に含まれる事例を抽出し、カードに書き出した。しかし子どもの表現は常に複合的であり、歌だけ、ことばだけ、動きだけ、という単独の表現は少なかったため、その都度、より強い表現の方へ分類した。事例総数はカードで、約1200枚となった。

その後、カードを4人に分け、各々月齢順に並べた。そして、4人の子どもそれぞれの「歌の始まり事例」を選び出し、その事例をビデオで確認した。（但し、E児の歌の始まりは、ビデオ収録開始前にさかのぼるため、ビデオによる確認はできていない。）

さらに、その事例の前後1ヵ月の子どもの、歌、ことば、動き、などの様子を共同研究者と共に検討、考察した。

3. 歌とはなにか

3-1 どこからを歌とするか

喃語から歌に変わっていく時期の音楽的発達研究は、同時期のことばの獲得に関する文献の量に比して、格段に少ない。このことは既に20年も前に永田（1981）によって「日本の子どもの0歳児からの音楽表現の発達的研究は言語研究に比して立ち遅れている」と指摘されているが、今日でもその状況に大きな変化はない。

同様に、園部（1975）もその著書の中で、新生児からのウルムジーク研究の必要性を説いている。つまり、ま

だ子どもの発声が、言語への発展系脈と音楽性獲得への系脈が、未分化なまま包括されている頃の、子どもの表現の研究の立ち遅れを指摘している。

しかしながら、乳幼児の声に関する研究は1970年頃より少しずつではあるが我が国でも論文が発表されるようになった。

それらの研究は、どれも乳幼児を対象にした声による音楽的表現を扱っているが、どのような発達段階の声を「歌」と定義するかは、未だ定説が無いため、研究者によって違っている。その主なものを①から⑤のカテゴリーに分類して次に示す。

- ① 喃語に抑揚の付いた声。つまりはっきりと意味のわかる歌詞もなく、メロディーの音程もはっきりしないが、抑揚のある発声であるもの。

喃語を発する時期にも、喃語と呼ぶにはあまりにもリズミカルで美しい抑揚のついた声を耳にすることがある。そのような自然発生的旋律を志村（1991）は歌唱様発声と呼んでいる。

- ② 既成の歌を大人がうたっているときに、一部分だけを一緒になって発する声。まだメロディーをうたうことはできないが、心の中では、うたってくれている大人と共にうたっているため、例えば、「ちゅーりっぷ」＜譜例1＞において「さいたーさいたー」の「たー」のところだけ大人と合わせて一緒に出す声を指す。

チューリップ

（譜例1）

作詞：近藤宮子

原曲：F.dur

作曲：井上武士



保育園1歳児クラスの音楽行動の観察を通し考察している藤田（1996）の「子どもが歌いはじめるとき」では、手遊び『魚がはねた』＜譜例2＞の最後「ビューン」³⁾のところだけ、保育者と共に声を出している子どものようすが報告されている。

魚がはねた

（譜例2）

作詞/作曲：中川ひろたか



- ③ 既成の曲の一節をうたっていると判断できる声、何の歌をうたおうとしているかが、表現の受け手にわかるもの。本論ではこの発達段階の発声を「歌」としている。

このカテゴリーはさらに2つに分類ができる。それは、子どもがうたい出す直前に、うたい出すきっかけとなる歌が聞こえている場合と、そうではなく子どもが自発的にうたい出す場合である。それはカテゴリー③だけでなくカテゴリー④の既成曲の場合も同様であるが、ここでは、双方を同一のカテゴリーに含めることとする。

- ④ 既成曲をうたっているもの。歌詞がついて、メロディーの音程がはっきりしていて、ほぼ一曲全部をうたうもの。大畑(1972)をはじめ、多くの研究は歌をうたえるようになったこの発達段階を「歌」として、研究対象としている。
- ⑤ 既成曲の一部を取り込むなどして即興的に作ってうたう歌。つぶやき歌。

この即興的な歌は、歌をうたい始めたあとの発達段階の表現であるため、うたい始めには当たらない。しかし、2歳前後の一時期に現われる特徴的な表現であるため、カテゴリーに加えることとした。

この例としては2歳児のつぶやき歌を分析した拙論(細田 1998)や、南・梅沢(1991)の即興うたの研究がある。

以上本論では、5つのカテゴリーに分類したが、幼児の声の発達の分類方法に関しての定説は、現在のところない。永田(1981)は、喃語表現、ことば表現、遊び表現、歌表現、即興表現、の5つの分類によって子どもの声を分析考察している。また、藤田(1990)は、ことばをリズムカルに唱える発声を、話しことばと歌の中間形式と名付けているなど、声に対する分類、命名もさまざまである。

3-2 定義

本論において、うたい始めの事例を選び出し、論じるためには、上記5つのカテゴリーの中で、どの声を歌と呼ぶかをはっきりさせなければならない。

ここでは、カテゴリー③の段階の声を歌とみなし、次の3要素を満たしたものを、歌であると定義する。

まず第1にリズムがあること。

第2にことばが、そのリズムにのっていること。表現の受け手としての、親や保育者が、子どもが何の歌をう

たおうとしているのかが、認識できるものとした。

第3にイメージを持っていること。これは判断しにくい、コミュニケーションとしてのことばではなく、表現としての歌であるというその差異の分岐点にイメージの有無があると考えためである。

それまでとは異なり、具体的な曲名を類推しうる歌をうたうようになる。それがたとえ1節であっても、既製曲の旋律と判断できたものをここで歌と呼ぶ。志村(1991)によると、この歌は、音響分析結果からもそれ以前の自然発生的旋律とは区別されるものであるという。

4. 研究の結果

4-1 うたい始めの事例

① E児のうたい始めとみられる事例

1歳4ヵ月('98.12.15)の保育者の日誌に、次のような記述がある。

『隣接する3歳未満児の部屋から「ちょうちょ」<譜例3>の歌が聞こえてきた。それを聞いていたE児はあとから追いかけるように、一人で「チョーチョ、チョーチョ」とうたった。』

蝶々

作詞者不詳/原曲：外国曲

〔譜例3〕

ちょう-ちょう ちょう-ちょう の は に と ま れ

この事例より2ヵ月前の1歳2ヵ月のころ、保育者が「アイアイ」<譜例4>の歌をうたっていたら、「アイアイ」と模倣したという記述や、1歳3ヵ月頃の家からの通信文の中に『キーボードを出してきて弾きながら「アイアイ」とうたっている。』との記述も見つかった。しかし、共同研究者の保育者と話し合って、1歳4ヵ月における「ちょうちょ」の歌をE児のうたい始めとすることに決めた。

これはこの事例のあと、クリスマスソングにあわせて鈴を鳴らし、身体をスイングさせて踊ったり、T児のからだをたたきながら「アイアイ」とうたうなどの記録がたくさん目につくようになったため、偶然にうたったように聞こえたのではなく、真に歌をうたいはじめたのだと判断したためである。

同様に、E児がことばを急にたくさん発するようになったのは1歳1ヵ月ころであると、判断した。

アイアイ

(譜例4)

作詞: 相田裕 美
作曲: 宇野薫一郎

1歳になり、自分で立って「ウオー」と声を出して2～5歩あるくようになったあと、1歳1ヵ月になると急に毎日の日誌にことばの記録が多くなってきている。

「ヨイッショ、ヨイッショ」、「センセー」、嫌な時は「イヤ」、「アッター」、ビーチボールを投げながら「バーン」と言うなど、意味とことばが合わさって身体の動きとも対応するようになっている。これは明かに11ヵ月ごろの「マンマ」「ワンワン」「チョウチョ」といった、意味をはっきりとらえる以前の、音を模倣していることばとは違う。

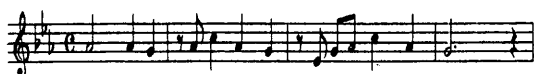
② T児のうたい始めとみられる事例

1歳8ヵ月('99.9.2)の時、人形を布団に寝かせ、布団をかけた上から「ネーネン、ネーネン」<譜例5>とトントンと叩きながらうたった事例を、T児のうたい始めとする。

江戸の子守歌

(譜例5)

日本古謡



この事例の1.5ヵ月前の7月14日の記録にも、同様のごっこ遊びの様子がある。布団をかけた人形を寝かしつけながら、他の子どもたちのまねをして「ネーネン、ネーネン」と言っている。しかしながらこの時の声は唱えているという感じで音程がはっきり下行長2度にはなっていない。

T児がことばを、急にたくさん発し始めた時期は、1歳6ヵ月ごろであった。T児はおとなしく、ことばは多くはないが、1歳6ヵ月に入ると「ポッポ」「イタ」「ミテミテ」「ジジ」「ナーイ」「ウマー」など、まさに急に増大した。大好きな新幹線や電車のことはなぜか「アジ」と言っていた。

③ R児のうたい始めとみられる事例

1歳9ヵ月('99.6.30.)のごっこ遊びの中で、人形

に布団をかけてトントンと、人形をやさしく叩きながら、「アイアイ」<譜例4>と、うたった事例をR児のうたい始めとする。発音ははっきりせず、はじめは「アーア、アーア」といっているようであったが段々に、「アーアイ」と「い」の発音が聞き取れるようになっていったため、この時を歌の始まりとした。

ことばに関しては、1歳9ヵ月の時点では「ネンネ」、「アイアイ」、いやだを「ダダ」、などの語を発していた。急にことばをたくさん発するようになったのは、1歳11ヵ月になってからのことであった。「ミニー」、「ミッキー」、ぼくを「モー」、「ポッポー」、飲むことを「ムー」、ぼくを「ボブ」、などのことばである。

よくしゃべるようにはなったが、くまを「ンマー」と言う等、R児独特の単語が多く、保育者や母親の通訳なしでは理解できないことばが多いところが、他の子どもと違う点であった。

④ Y児のうたい始めとみられる事例

1歳10ヵ月('99.6.5.)に、午睡の時、子どもたちを寝かしつけている保育者がE児の要望で静かに「アイアイ」とうたっていると、まだ寝つけないY児が「アーアイ、アーアイ」とうたう。保育者のうたう歌に誘発されてうたった事例だが、ことばも音程もしっかりしていて、はっきり「アイアイ」をうたっていることがわかる事例である。

ことばに関しては、1歳8ヵ月ごろに急に発語し始めた時期があると考えられる。記録には、「ワンワン」、「ニャーニャー」、「ヤダー」、「ネンネ」、「オカワリ」、とうさんを「トットー」、かあさんを「カーシャン」、など多数書かれている。

4-2 結果

研究の結果は図1に表わす。

わずか4人の観察だけでは何とも言えないが、今回の結果としては、R児だけが、ことばをほとんど話さないうちに、メロディーをうたい始めた。以上4人のうたい始めの時期とことばを急に多く発し始める時期の関係は、歌が先であるとも、ことばが先とも言えない結果となった。

4-3 考察

4人のうたい始めの時期に6ヵ月もの開きがあった。その理由には、それぞれの子どもの発達個人差と共に、

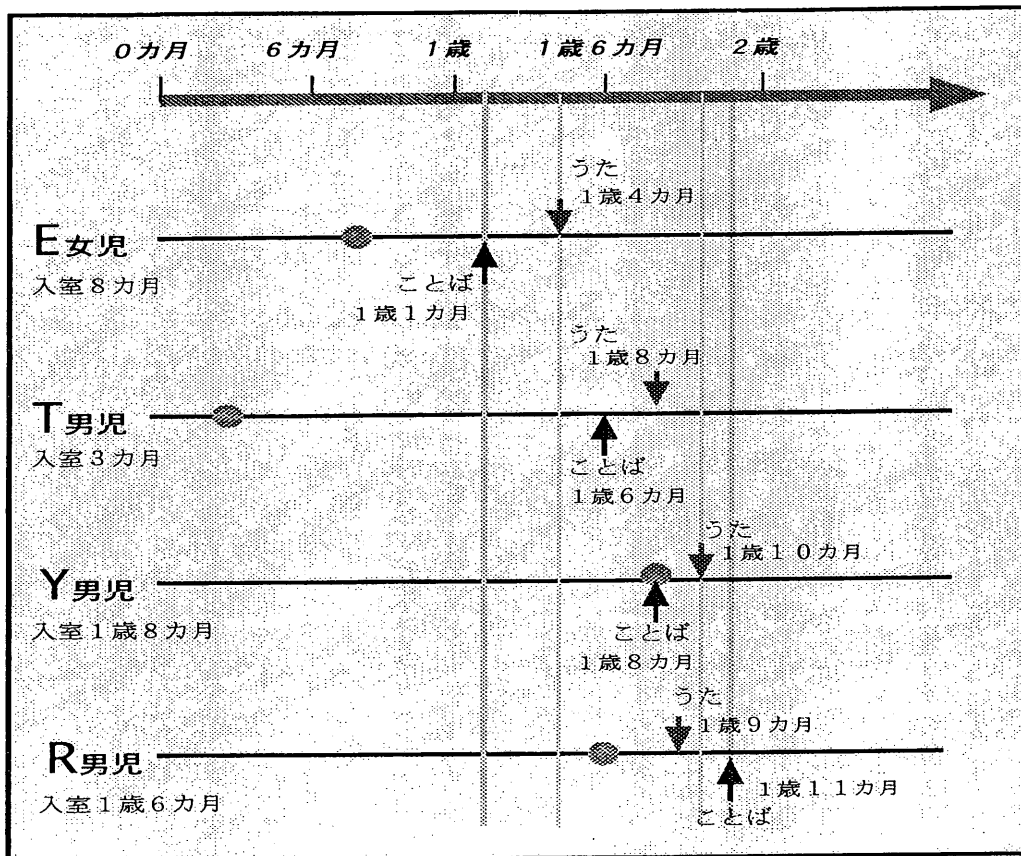


図 1 うたい始めとことばの始めの時期

育った家庭環境や、集団保育の開始時期の違い、母親などのことばかけ、うたいかけの頻度の違い、などさまざまな要因が、相互に関係していると考えられる。

入室時期の早い2人の方が、他の2人より早くうたい始めたことと、この保育室の保育者たちのうたいかけの頻度の高さ、との相関関係は、もっと数多くの事例を集めることではっきりするかもしれない。

次に、ことばを急に多く発し始める時期と、うたい始めの時間的順序は、ことばを発し始めた後でうたい始めた子どもが3人いた。それに対して、R児だけは、発することばがまだ非常に少ないうちに、うたい始めた。

R児がことばを発語し始めたのは、うたい始めてから2ヵ月も後のことであった。ことばの獲得時期と歌い始めの時期の関係が、他の3人とまったく逆の事例だが、これはなぜなのか、非常に興味深いことである。4人の観察結果からだけでは、どちらが、より一般的であるなどとは言えない。しかしながら、両方のタイプが存在す

るということは、確認できた。つまり、永田(1981)と伊藤(1987)のどちらの説も否定はできない。

音楽的にうたい始めの旋律を分析すると、「ちょうちょ」も「アイアイ」も下行跳躍短3度の音程(ソ→ミ)である。日本語の抑揚にそって「さいたさいた」、「ぼっぼっぼ」〈譜例6〉、などのように、上行順次2度進行(ド→レ→ミ)が歌い始めであるという通説、に反する結果であった。

鳩

〈譜例6〉

文部省唱歌



Carl Orff (1895~1982) によるシュールベルク「子どものための音楽」の導入の旋律は、ドイツ語の自然な抑揚に添ったものだと言われているが、それは下行跳躍短

3度の音程となっている。今回のE児、R児、Y児、の3人の例は、偶然にもドイツ語の抑揚と同じ、うたい始めとなった。

母国語とうたい始めのメロディーの関係については、本論とは視点が異なる問題であるため、ここでは触れないことにする。つまり、ことばをしゃべっているうちに、自然に抑揚のついたもの（仮に、唱え歌とよぶ）は、既成の歌を獲得していく一段階のものではなく、別のものであると筆者は考えているため、本論のカテゴリーに含めていない。母国語の抑揚は、そのような唱え歌に影響を与えるが、既成歌の獲得には影響しないと考える。この問題は、日本語の抑揚に従って、唱えるところから出発したわらべ歌の旋律との関係を含め、稿をあらためて考えてみたい。

では、今回の4人の子どものうたい始めのメロディーに影響を与えたものは何であろうか。それは、子どもが生後、うたい始めるまでに、どのような旋律をより多く耳にし、楽しんできたかによるのであろう。

5. おわりに

子どもたちは、うたい始めるまでに、さまざまな形の経験をかれなりに蓄積していた。それは想像以上に大きい。そしてもちろん‘その時’は突然訪れるのではなく、うたい出すその時まで、子どもは全身で周りの音を聴き、感じ、楽しんでいるようである。

今回、観察結果を書き出したカードを見ると、歌、ことば、動きの表現が相互に関係しつつ、子どもたちが日々成長していている様子がよくわかる。本論では、歌とことばとの関係に注目したが、うたい始めの時を迎える以前には、身体の動きの発達が大きく関わっていることもよくわかった。

音楽を聴いて、足をバタバタさせたり、手をたたいたり、手で机を叩いたり、保育者のうたう歌に両手を上げて左右にスイングしたり、さらには、膝を屈伸してリズムをとったり、好みの曲のCDが鳴り始めるとラジカセを見つめ興味を示したり、曲を聞きながら走り回るなど、嬉しさを全身で表現しているのである。

今後は、歌の発達と身体の動きの関係、についても視点を絞って、詳しく観察してみたい。

今回はカテゴリー③を歌であると定義して論をすすめたが、今後は、既成曲のうたい始め以前に遡り、観察研究をしたいと考える。つまりカテゴリー①を歌であると

して、その歌の発達を詳しく観察することを次の研究課題としたい。

子どもの声の発達はその個人差、個体差だけでなく、家庭内や保育所の音楽的環境、母親や保育士のうたいかけやことばかけの頻度や、その質等の音環境が大きく影響していると考えられる。先行研究には、研究者自身の子どもを観察対象としている研究が多いが、やはり音楽家の家庭の音環境は一般家庭より音刺激が多く、より音楽的な環境であるという印象をうける。

今後は、一般の子どもたちにとって、どのような音環境が望ましいのか、という点にも言及していきたい。さらに音声学、言語学、心理学、脳生理学などさまざまな関係学問分野との共同研究や、情報交換なども進めたい。

尚、本論は第53回日本保育学会において、口頭発表、及び、論文集⁴⁾に発表したものに加筆したものである。

文 献

- 園部三郎 (1975) 『下手でもいい音楽の好きな子どもを』
音楽の友社 p.156
- 永田栄一 (1981b) 『子どもの音楽表現の形式と学習Ⅱ』
季刊音楽教育研究 27号 pp.154~162
- 伊藤勝志 (1987) 『幼児期初期の歌唱行動についてⅡ』
北海道教育大紀要 38-1 pp.167~177
- 志村洋子 (1991) 『一歳児の歌 — 歌唱様発声の音響的分析的研究』 音楽教育の展望 p.152 音楽之友社
- 藤田扶美子 (1996) 『子どもが歌いはじめるとき』 日本保育学会第49回大会研究論文集 pp.74~75
- 大畑祥子 (1972) 『幼児における旋律形成の発達の研究Ⅰ — 幼児の旋律形成におよぼす音楽環境の影響』
音楽教育研究No.77 音楽之友社
- 細田淳子 (1998) 『音楽表現の原点としてのつぶやき歌』
保育学研究第36巻第1号 pp.12~19
- 南囀子・梅沢由紀子 (1991) 『言語習得期の音楽的表現 — 「即興うた」の旋律性 — 』 音楽教育学の展望Ⅱ
日本音楽教育学会編 音楽之友社 pp.166~175
- 藤田扶美子 (1990) 「保育園2歳児クラスで観察された話し言葉と歌の中間形式」 日本保育学会第43回大会研究論文集 pp.148~149
- Carl Orff (1895~1982) 現代ドイツの作曲家、音楽教育家。Orff-Schulwerk 「Musik für Kinder I」 Schott 1950

注

- 1) 小野明美, 本学児童学科助手, 本学ナースリールーム保育士.
- 2) シャープ液晶ビューカム VL-HL2 Hi8
- 3) 原曲では「ビューン」ではなく, 「ビョン」である.
- 4) 第 53 回日本保育学会論文集 pp.132~133

Summary

Babies vocal sounds are diversified into two types of sounds; linguistic sound and musical sound. Some researchers insist that the beginning of speaking is earlier than that of singing, although others insist the opposite. The aim of this research is to examine which idea is correct. For this purpose, we chose four children in a nursery room, and made observations to decide which comes first, singing or speaking. The result is that three of the four children began to speak earlier than to sing, yet one boy began to sing before he began to speak. Presumably, the difference comes from their environment, but a future research is required.